
花の錬歩会

河 美子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

花の錬歩会

【Nコード】

N2367K

【作者名】

河 美子

【あらすじ】

何で錬歩会なんてあるのよ。いやになっちゃう。

今日は高校の鍊歩会。何が好きで14キロも歩くのよ。日焼けするって。全く。乙女が皮膚ガンになっただろうするのよ。先生の時代とは違うんだって。しかも、これは絶対参加しないと単位がもらえないの。

私は前田周子。哀しいことに体育委員。みんなの鍊歩会の参加証を持って行って現地で渡すという大事な仕事が待っている。

「ねえ、今日のこのジャージ姿、よその学校に死んでも見られたくないわね」

「本当よ、何で学校のジャージってこうもダサいの」

「せめてナイキとかアディダスとかの製品にしてほしいわ」

はあ、もう嫌になる。女子は教室でひたすら日焼け止めを塗っている。男子は隣の教室で騒いでる。もうこれだからガキは困る。そして、タオルを首に巻き帽子を深くかぶる。

「わあ、手袋忘れた」

「私、用務員さんに借りてきた。草刈りの時の軍手」

「いいなあ、手が焼ける」

いつからかなあ、こんなにも歩くのが嫌いになったのは。中学校はまだ男子とギャーギャー言って追いかけてたりしてる日もあったのに、2年たった今は朝から日焼け止めと目元だけはばっちり化粧する子もいる。私は日焼け止めとリップだから可愛いもんよ。髪だつて染めてないし。堺さんは夏から少しずつ脱色してる。花井さんも前髪は黒いけど、後ろに少し色を入れてるみたい。男だつて横矢は染めてるし、松野はスキンヘッド。これもまあいいかも。

武井はピアスを開けたのね。学校ではしてないけど耳たぶに穴があるみたい。帰ったらきつと入れてるんだ。私も入れたいなあ。でも、お父さん、うるさいからなあ。

「おう、周子、何だその格好。田吾作みたいじゃないか」

「仕方ないでしょ。日焼けしたくないもん」

こいつは井伊直介、歴史上の人物と字が少し違うだけ。だから、みんな大老って呼んでる。

「疲れるなあ、歩くだけって。でも、これ行かないと体育の成績が2にされるって」

「あんまりよね、こんな時代に錬歩会なんてうちだけじゃないの？」

「隣の女子高が窓から見てるぜ」

「げっ、やなやつ。きつと笑ってるのよ。ダサイ青ガエルのジャージー見て」

集合のアナウンスが鳴った。みんなで、ありがたい青野先生の話聞いて出発。2人で並んで行けて、無理だしそんなこと。あつという間に4人で横並び。

「昨日のテレビ見た？」

「うん、見た見た。嵐カツコいいよねー」

ピーッ、笛が鳴ってる。

「そこ、4人が並んだらいかん」

「はい」

と可愛く答えるけど、みんなその時だけ守るけど5分もするとまた横並び。先生も途中から諦めてもう何も言わなくなる。はい、私たち女子高生が世の中で一番偉いのって感じ。

小高い丘のてっぺんに目的地の鳴海公園がある。まだまだ先は長いけど、井伊がそばにやって来た。

「おい、今度の日曜、遊びに来いよ」

「何で？ 模試があるじゃん」

「そんなのやめとけよ」

「無理です。もうお金払ってるし」

「ちっ、つまんねえな。折角親が旅行なのに」

「どうして？ 何処に行ったの？」

「韓国旅行だって。息子は模試なのに」

そんなこと関係ないでしょう。親にしてみれば。でも、親がいな

い日の男の部屋へ私を誘うの？ それって彼ってこと？ 当然するつもりでしょ？ えーっ、それはどうかなあ。井伊は嫌いじゃないし、どちらかといえば好き。だけど、意外と私って硬いのよ。まだバージンなんだから。井伊はさりげなく言っただけ、付き合つても言ってもらってない。つまらないわよ、そんなの。やっぱり、きちんと扱ってほしいもん。

「なあ、最近面白いことないだろ。だから、うちで遊ばないか」

「えーっ、何して遊ぶつもりなの？」

知ってて聞く私。ちよつと流し眼もしてみせる。

「何って、お好み焼き」

「はあ？」

思わず口があんぐりと開いてしまった。何でお好み焼きなの。

「俺のおばちゃんが関西でお好み焼きを焼いてるの」

「商売で？」

「そう、だから、この前習ってきた。ご馳走するって、どう？」

嬉しいけど、別の意味でがっくりきた。緊張して損した。

「だから、模試が終わったら来いよ」

「うん、一人？」

「ううん、俺も入れて6人」

あーあ、もうつままない。何で5番目。ビリじゃん。歩くも疲れてきたし井伊にも腹が立って、参加証も飛ばしたい気分。どうせ、私ってその程度なのよ。井伊は喜んでどこかへ走って行った。すごいガキだったのね。はあ、そんなあ、でも関西風お好み焼き、おいしいかも。

青野先生が笛を吹いた。あーっ、着いたんだ。

「はい、ここに並んで。体育委員から参加証貰いなさい。貰った者は明日担任に必ず提出すること。無くしたら成績はないと思え」
やっと私の出番。ナップサックから参加証を取り出し、一人ずつ渡していく。もうすでに名前入りだから、他の人には渡せない。最後の一枚は前田周子。やったー。何だか気分爽快。

「ご苦労さん。前田さん」

「はい、青野先生。終了しました」

みんなでお弁当を開いて食べる。学校よりずっと美味しい。錬歩会、結構いいじゃん。運動してるから美味しい。女子はしゃべってる時が一番幸せ。男子は離れて静かに食べてる。

「うまそうだな。でも、これ食べてみるよ」

井伊はなんだかんだ言っても私の近くにいます。彼のお弁当は爆弾風おにぎりが4個。

「海苔でぐるぐる巻きにしてるからうまいぞ」

「ひよつとして、井伊の手造り？」

「おう、俺は将来は美味しい店を出したいんだ」

「へえ、知らなかった」

「おう、初めて言ってるもん」

「ふーん、結構真面目に考えてるんだね」

「うん、高校卒業したら料理専門学校に行くつもり。だから、模試はいらん」

「そうだねえ」

「だから、自信作を食べてもらうつもりだ。井伊風お好み焼き」

「わかった。でも、私のほかにも4人も来るんでしょ」

「ああ、おばあちゃん、おじいちゃん、兄貴二人、それと前田周子」

あわわわ、そうなの。先にそう言つてよ。嬉しすぎるじゃないの。勝負下着はつけなくてもいいのね。まずは顔見せね。それを聞いたら帰りもルンルン気分歩いて帰れるわ。

「ねえ、井伊っていいわあ」

「なんじゃ、それ」

そう言いながらも嬉しそう。私、食べ物の店で何をしたらいいのでしょうか。レジ？ それとも皿洗い？ 分かった、シェフの夜伽に参ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2367k/>

花の錬歩会

2010年10月8日14時55分発行